

震災時における協同組合運動と平和の実現

奨励	大鉢 忠〔おおはち・ただし〕
奨励者紹介	同志社大学理工学部教授 同志社生活協同組合理事長
研究テーマ	分子線エピタキシー法によるⅢ族窒化物半導体のシリコン基板上への単結晶成長法とそれを用いた光・電子デバイス研究

ついに、我々の上に
霊が高い天から注がれる。
荒れ野は園となり
園は森と見なされる。
そのとき、荒れ野に公平が宿り
園に正義が住まう。
正義が造り出すものは平和であり
正義が生み出すものは
とこしえに安らかな信頼である。
わが民は平和の住みか、安らかな宿
憂いなき休息の場所に住まう。

（イザヤ書 32章15―18節）

おはようございます。清々しい秋の朝に、青空チャペルでお話をさせていただく機会をいただきまして感激しております。今年度秋学期のチャペル・アワーは、マタイによる福音書5章9節から、「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」という箇所が統一テーマとなっております。そのなかに「平和」という言葉が出てまいります。また今年、3月11日、東日本大震災と、福島原子力発電所で事故が起こりました。このとき私は、生活協同組合運動にて重要な役割を担った賀川豊彦を思い出しました。今日は「平和」と「生活協同組合運動」を中心としたお話をさせていただこうと、このようなタイトルをつけさせていただきました。

同志社生協と安部磯雄

先ほどご紹介いただきましたように、私は、同志社生活協同組合（以下、同志社生協）理事長を拝任しまして、今年で7年間務めさせていただいております。この同志社生協は1898年（明治31年）当時、同志社尋常中学校教頭でおられた安部磯雄先生が、消費組合として同志社につくられたものです。これが日本最初の大学生協と呼ばれている、そういう伝統を受け継がせていただいております。安部磯雄先生は14歳の時、同志社英学校に進み、直接、新島襄先生に学ばれました。安部先生ご自身が同志社でキリスト教というものに初めて出会われ、新島先生からキリスト教の洗礼を受けられた。しかし、キリスト教を学んでいるうちに、どうも納得いかない。もう少しキリスト教について納得いくような勉強をしたいということで、アメリカ、ドイツ、イギリスに行かれて、新しい神学に対しての造詣を得て帰国されました。安部先生の同志社英学校生徒時代の日記が早稲田大学に残っております。安部先生は同志社の後、東京専門学校（現在の早稲田大学）へと行かれました。早稲田の野球部の学生さんたちを連れて、日露戦争当時、アメリカに渡って国際親善をなさった。先生は、また「学生野球の父」とも言われております。早稲田で教授になられましたので、ご家族は安部先生の遺品を大学に寄贈なさり、現在、早稲田大学に日記が残っている。その日記が、14歳からの同志社時代の日記だったということで、それを同志社生協創立の1898年から110年後の2008年に、安部磯雄日記復刻委員会編集で、同志社社史資料センターより、『新島研究』100号の別冊『安部磯雄日記―青春編―』を出版しました。安部先生は同志社大学で講演を2回ほどされています。1933年（昭和8年）同志社礼拝堂での「吾が愛する母校の諸君へ」と、1935年（昭和10年）栄光館での同志社創立60周年記念講演会「将来の宗教生活と経済生活」です。（安部磯雄日記復刻委員会編集『新島研究』100号別冊『安部磯雄日記―青春編―』同志社社史資料センター出版 2008年発行 161―190頁参照）。また、先生は衆議院議員として、また社会党党首としても、平和運動に大いに尽くされました。

関東大震災と賀川豊彦

次に、東日本大震災の折、すぐに思い起こした賀川豊彦先生についてお話しします。この先生は「生協の父」とも言われております。むしろ、「協同組合の父」と言った方が良いでしょう。労働組合運動や、農民運動と農業協同組合、信用金庫、協同組合運動など幅広く活動されてきました。1904年クリスチャンになられた賀川先生は、1909年、神戸市新川のスラムに、貧しい人びとと一緒に住みながら、貧民の救済活動をされていました。そのときのことが書かれた自叙伝『死線を越えて』という著書が、当時ベストセーラーとなり、その印税はほとんど組合の運動に使われました。賀川先生がこのような運動をはじめられてから、ちょうど2009年で100年になるということで、「賀川豊彦献身100年記念行事」が日本の各所で行われました。同志社生協も人文科学研究所の研究会で「京都地域における大学生協の総合的研究」というテーマで、部門研究に加えていただいております。同志社生協をつくるるとき、大学の先生方が中心になってされていた共済活動、協同組合活動も、すべてキリスト教の実践という形で行われておりましたので、そういう流れから賀川先生には、1919年（大正8年）ぐらいから何回も同志社大学に来ていただいております。それ以外にも、かなり後になりますが、1957年（昭和32年）、京都で第3回世界連邦アジア会議が開かれ、賀川先生が議長としてお見えになられた。ちょうどそのとき、電車のなかで当時の同志社総長、住谷悦治先生と出会われて、「同志社に来てお話をさせていただけないか」ということになったのです。今出川校地の寧静館会議室で座談会形式のお話をされた当時の録音テープが残っております。それともう一つ、翌年のアッセンブリアワーで「宇宙観の革命」ということで物理学のお話等を詳しくなさっている録音テープもありましたので、それも併せて原稿にし、『賀川豊彦献身100年記念 賀川豊彦のキリスト教と協同組合』という冊子に掲載しました（発行者 同志社大学人文科学研究所第4研究（有）ワーズ発行 2010年3月）。賀川先生とのかかわりを、ここに結びつけてさせていただいたことになります。

賀川豊彦先生が、世界で有名になられたのは、『BROTHERHOOD ECONOMICS』という著書をアメリカが恐慌に陥っているとき、協同組合的な経済の仕組みで世の中を運営するということ強調する講演をアメリカでなさったものを出版されたからです。英語で書かれている本ですが、世界各国で翻訳されて、日本でも改めて翻訳されたという有名な本です。先に述べました『死線を越えて』を含め、多くの作品を書かれ、1947年と1948年には、ノーベル文学賞の候補になりました（毎日新聞2009年9月13日より）。賀川豊彦先生の書物をいろいろ読んでみますと、協同組合活動を通じて、世の中の平和を実現するのだ、この平和を目指すことにあたっては協同組合による社会行動というものが正しい道であるのだ、ということ唱えられていたように思います。1954年から1956年には3回連続でノーベル平和賞の候補にもなっています。1923年（大正12年）9月1日、賀川先生は関東大震災の翌日に、新聞のニュースで震災のことを知り、すぐに神戸から船で横浜を経由して東京に行かれて救済活動を始められ、その後、何度も訪れ、最終的には東京で被災者のための施設なども設置する。そういう活動から、協同組合の動きができていったといったところでございます。

協同組合とは

今日の奨励のテーマとさせていただきます「震災時における協同組合運動」というのは、東京の関東大震災をはじめ、神戸の大震災の時も、生活協同組合関係の方々が、大勢、お働きになったこと。こういったところを結びつけて協同組合の話をしていきたいと思います。次に安部磯雄先生が、どのようにして協同組合、消費組合にご関心をおもちになったかということですが、これは安部先生が生徒のころ、当時は今出川キャンパス内に寮がありまして、生徒たちは全員寮に入ることが義務付けられておりました。寮の近くの相国寺に散歩に行かれたとき、それは、ひどいあり様というか、貧しい人びとが溢れていたそうです。それをご覧になって、「どうやって、貧乏をなくしていったらいいのか」とお考えになったようです。そういう考えにひたして安部先生ご自身も明治維新のとき、今までの武士であった実家の財産が、全部なくなったという苦勞をなさっていたということですね。はじめは、「岡本磯雄」という名前でしたが、当時の徴兵制度の関係で、60歳以上の扶養家族がいれば、徴兵免除の特典があるため、お父さんが岡本の姓から最初、竹内という姓に変えられ、生徒の時は竹内、そして卒業してから、安部という姓の家の養子になります。その後は安部の姓なので、我々は安部磯雄として、把握しています。アメリカ留学時代にエドワード・ベラミーという人の小説を読まれて「貧乏をなくすには経済的な面から直していく必要がある」と思われた。それと同時に「社会主義」という言葉を使っておられますが、社会主義を実現することによって貧乏がなくなる、平和がくるとお考えになったようです。生協と言いましても、いろいろな生協がございます。通常は地域生協です。それは購買品を商品として買うだけのものですが、大学生協は食堂部門も重要なファンクションとしてなっております。当時は全寮制でしたので、食堂設備などは、学校の福利厚生施設として全部、学校が生徒たちの面倒を見ておりました。安部先生の自叙伝は、どのようにして自分が社会主義者になったかということをお書きになっている本です。そのなかで「兎に角私共の食事が其質に於て不満足であつたことは學生が時々蕎麥屋、隠屋、牛肉屋、料理屋等に入出したことにより證明することが出来る。（中略）後年私が米國で寄宿舎生活を送つて居た時の経験によれば、米國の學生は殆んど料理店に足を入れるといふことはなかつたやうである。其理由は極めて簡單である。米國の寄宿舎では、明治廿五六年頃（約四十年前）に於ける一ヶ月の食費が十五弗であつた。即ち我貨幣では三十圓といふことになる。三度の食事は實に贅澤であつて、私共の食慾が如何に旺盛であるにしても、決してこれ以上のものを要求しなかつた。これに反して同志社の食費は一ヶ月二圓五十錢であつた。これで私共の食慾が

満足を得る筈はない。私は自分の経験から食慾を満足せしむることが青年教育に最も重要なものではないかと思ふ。」（安部磯雄著『社会主義者となるまで』改造社発行 1932年 52—53頁）と、お書きになっておられます。

創立当時、同志社はこじんまりとした学校ですから、生徒時代、体育の一つとして山野を駆け巡ったり、兎狩りをしたりということもあったようです。そのときには、新島先生も一緒に参加されているのですが、獲物がとれない、あるいは少ないときには鹿の肉や、牛肉を新島先生自ら寄贈なされて、学校の食堂で生徒たちと一緒に食されたということも書かれています。新島先生時代の同志社というのは、実質上、学生たちの生活をサポートする体制になっていたということではないかと思っております。

安部磯雄先生は、先ほど申しましたように、アメリカ、ドイツ、イギリスからお帰りになって、その時に「社会主義」というものを広めようとされ、その後、いろいろな方々が社会主義の運動をなさっています。しかし、通常言われている「社会主義」と、安部先生が提唱なさった「社会主義」とは、意味合いが若干違うという認識がされております。安部先生が、昭和8年、同志社大学でご講演されたとき、お話の最後でおっしゃった言葉です。「私が世を去って、新島先生にお会いする時、先生が、『安部サン・・・（君とは決して申されなかった）・・・よくやってくれました。』といって下さるか何うか？私にとつては新島先生からの此の一言を賜る事が出来れば生涯の意義は完（まった）い」（『安部磯雄日記—青春編一』同志社社史資料センター発行 2009年 167頁）。この講演の聴衆のなかには、のちに同志社生協の初代理事長をなさった嶋田啓一郎先生が学生として聴講されており、非常に感動なさったと伺っております。また、記録にも「聴くものまた泣かざるは無く、感激の拍手は万雷の如くチャペルを揺るがしてしばし止まなかった。」（167頁）とも書いてあります。

安部磯雄先生と並行して、賀川豊彦先生もクリスチャンというところから、お二人とも特に共済活動というものを進められました。

平和を実現する人びと

安部先生は社会主義を広めようというところから社会民主党宣言書をお書きになっていますが、要綱の中には「平和」という概念も含まれております。「社会主義」という言葉が現在の世の中において、何か同じ名前で行われていても、安部先生がおっしゃっていた「社会主義」とは違うイメージが人びとのなかにあるのと同じように、「平和」という言葉につきましても、人によって感じ方が違うと思うのです。同志社では新島先生が第一回卒業生を送り出すときに、その式辞の最後のところで“Go, go, go, in Peace. Be Strong. A Mysterious Hand will guide you!”と、叫ばれたと伝えられています。この言葉は今出川校地寒梅館のハーディーホールに掲げられています（写真参照）。この「Peace」という言葉は、いつごろから、今日の「平和」という漢字が使われるようになったかということに、個人的にも関心をもっているのですが、少なくとも新島先生は卒業式のときに、「Peace」という言葉をお使いになっている。ただし新島研究関係の先生方のご指摘によると、この「Peace」という言葉は、現在の意味ではなく文頭のイザヤ書32章15—18節のように「安らかな世界」と考えているとおっしゃる方もいらっしゃいますが、私は同じ意味ではないかと思っています。新島先生の生誕の地である群馬県に、上毛カルタというものがあり、「ハ」は、「平和の使徒 新島襄」と、なっています。

私はクリスチャンではありませんが、同志社大学にきまして、キリスト教からは、いろいろと学ぶところがありました。今日のテーマにも「平和」という言葉が出てきます。新島先生も当時、生徒たちに「平和」を説いておられたのではないのでしょうか。安部先生も「平和」という言葉を新島先生の授業のなかで聞き「平和の必要性」を考えていたお一人だったのではないかと思っています。

賀川先生の「平和」と安部先生の「平和」との接点は、あまりはっきりとはしないのですが、東京に最初の大学生協をおつくりになった共同の起案者のお一人になっていらしたというつながりがございます。

私自身は安部先生や賀川先生の著書を通して、生協に関わっておりました関係で、「平和」というものについて、私なりに何か考えるチャンスをいただいたと思っています。皆さん方も、ぜひ、これらの著作に触れていただいて、「平和」というものについて、考えるきっかけをつくっていただけたらと願っております。ご清聴ありがとうございました。

2011年10月19日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録

（追記）
同志社大学の学生証と社員証に、同志社生協の電子マネー、愛称「Joe Card」（ジョウ・カード）が組み込まれ、2011年4月1日よりスタートしました。ICカードの電子マネー利用金額の0・1%が東日本大震災復興支援募金および原子力災害学生支援募金に寄付されています。